

平成20年5月27日

九州大学大学院経済学研究院
産業マネジメント部門長
星野 裕志 殿

出張等報告(記録)書

報告者

ICABE 学生交流推進プロジェクト
<南京大学ビジネススクール訪問チーム>
教員代表: 経済学研究院教授 出頭則行
経済学研究院準教授 高田 仁
学生代表: 産業マネジメント専攻 小寺 雄一
産業マネジメント専攻 富松 寛考

大学改革推進等補助金による出張を下記のとおり行いましたので、報告いたします。

記

1. 費用の負担

平成20年度大学改革推進等補助金

2. プログラム名称

ICABE 学生交流推進プロジェクト(第8回)

3. 用務地

中華人民共和国(南京市)

4. 用務先

・南京大学
・Phoenix Contact

5. 用務の概要と事業の関連について

<用務の概要>

学生間討論会、企業訪問、現地視察

<事業の関連>

ICABE に基づく学生間交流、企業訪問及び現地視察を通して、中国の最新事情把握によ

る研究成果の向上と提携先ビジネススクールとの連携強化のためのネットワーク形成を図る。

6. 出張日程

平成20年3月7日(金)～3月10日(月)4日間
(3月10日は上海オプションツアー)

7. 参加者(合計14名)

出頭則行 教授
高田仁 準教授
藤村まこと 助教(QBS 事務室)

(産業マネジメント専攻1年)

小寺雄一
富松寛考
田中理絵
張碩秋
鶴田竜也
永池明日香
花田真
松本幸博

(産業マネジメント専攻2年)

晏興隆
Shazlinda Md Yusof
魯近

ICABE学生交流プロジェクト

目的: International Consortium of Asian Business Education (ICABE)に基づく学生交流事業の一環として、南京大学と下記の合意に基づき、中国の最新事情把握による研究成果の向上と、提携先ビジネススクールとの連携強化のためのネットワーク形成を目指す。

ICABE の正式活動としては人的ネットワークの形成と知の共有化を図りながら、今後のQBS の提携校の交流モデルを探求する。

交換留学制度の実現に向けたディスカッションを行う。

学生同士が主体となりながら、双方向での討論を行い、今後の国際交流の発展となるような関心領域の共有を図る。

日程:

3月7日(金)

08:00 福岡空港国際ターミナル集合

10:00 MU532 便(10:00福岡発、10:30(現地時間)上海着)で上海へ移動

11:30 マイクロバスで上海浦東国際空港から南京市へ移動

17:00 Phoenix Contrac 社を訪問・見学

19:30 夕食(南京大学主催歓迎パーティー)

宿泊: 南京古南都飯店

3月8日(土)

09:30 南京大学趙教授による特別講義(Economic Reform: The Change of Structure)

10:30 休憩:南京大学内見学

11:00 九州大学出頭教授による特別講義(International Marketing with Cross-Media)

12:00 昼食

14:00 QBS と南京大学学生によるプレゼンテーションとディスカッション

Human Resource Management #1(南京大学)

Human Resource Management(QBS)

Human Resource Management #2(南京大学)

Economic Growth(QBS)

Economic Growth(南京大学)

18:30 夕食(QBS と南京大学の懇親会)

宿泊：南京古南都飯店

3月9日(日)

09:00 南京市内観光(明孝陵)

14:00 「諧和号」(中国版新幹線)で上海へ移動

16:00 ホテルチェックイン

18:30 夕食(QBS 卒業生との懇親会)

3月10日(月)

10:00 上海市内観光(豫園・新天地)

12:30 昼食(上海交通大学交換留学生との懇親会)

15:00 リニアモーターカーで上海浦東国際空港へ移動

18:00 MU531 便(18:00上海発、20:30福岡着)で福岡へ移動

3月7日(金) 企業訪問(Phoenix Contact 社)

報告者: 富松寛考

福岡から上海到着後すぐに南京へ移動。陸路移動 5 時間で今回の企業訪問先 Phoenix Contact 社に到着。

Phoenix Contact 社はドイツが本社の電子部品、コネクタなどのメーカーである。我々QBSメンバーは、当初の予定時刻を一時間遅れていたために、会社説明を受ける前にそのまま到着後簡単に工場内を見学することとなった。梱包・発送行程から生産ラインへと逆ルートでスタッフの説明の元、見学を行った。

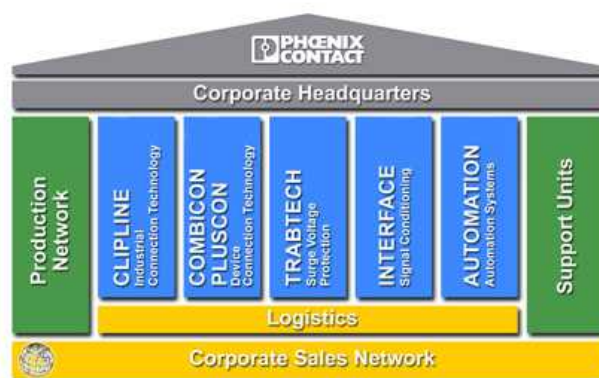
(施設内は撮影禁止であったため写真での資料はなし。)

生産体制以上に、工場内で印象的であったのは、各建物の出入り口など壁のいたる所に『易经』の言葉が掲げられていた点である。これはドイツ資本ではあるが、中国における現地化・適応化の表れと実感した。何とその易经に混ざって大きく「5S」(整理・整頓・清潔・清掃・躰)が掲げられていたことには、驚きであった。

作業スタッフ構成をみると機械取り扱いなどでは男性を、組み立て工程では女性を多く目にした。駆け足で工場見学をした後に会社状況等をプレゼン形式で説明を受けたが、説明者は南京大学ビジネススクールの卒業生であった。

先述の通り Phoenix Contact 社の本社はドイツ(ブルームバーグ)ではあるが、世界での生産工場拠点としては、南京工場がアジアの拠点となっていた、その他ではアメリカ(ハリスバーグ)である。また経営展開としては現地化が進みドイツ本社から技術系が一名常駐する程度であとはすべて中国人によるマネジメントである。

会社概況では下記の構図を用いて説明。



(Phoenix Contact HPより)

会社としてまだ成長過程ではあるが、Small & Medium Size business から 4 年で Global Player へ成長してきている点を強調。南京に工場を設立したメリットとしては、学生をはじめとした人材が豊富であることと、労働力コストがまだ他の工場エリアに比べて低い点を挙げていた。また 2008 年 4 月からはフラクフルトからの直行便が就航するなど、南京周辺の工場地帯のこれからの更なる成長を感じさせた。Phoenix Contact 社として 2010 年までさらにグローバルに展開する上での目標として (Success)3 = innovation, market penetration, operation を掲げている。

March 7th (FRI) Factory Visit (Phoenix Contact)

Reported by Shazlinda Md Yusof

We visited Phoenix Contact China, a contact and terminal maker. Phoenix Contact China is a subsidiary to the parent company in Hanover, Germany. This company was established in 1993, operated a building rented from a farmer and has grown now to a large factory property with further expansion plan to develop an R&D center by the end of 2008.

We were guided into the factory starting from the logistics to production. The company has 500 workers who work on 3 shifts daily. 60% of the products are for domestic market while 40% are exported to other countries. The factory is very clean and the staff cafeteria is modern and colorful.

During a briefing with the human resource manager, we learnt that this company has experienced a leapfrogging growth since its establishment. Its annual average growth is about 23%. Among the secret of the success is its globalization strategy and their effort of making the company a trusted best brand to customers and workers. The company believes that workers entitle to work-life balance. They are not encouraged to do overtime. Although the physical design, layout and even the chemical ingredients are decided or imported from Germany, the local management is empowered to select their own strategy in order to reach the target set by the headquarters. More and more management level staffs are sent for MBA programs to strengthen their management skills.

The visit to the factory may be short because we had a very limited time but it has given me a different picture of company management. Thank you to the management of Phoenix China who has arranged for this factory tour.

3月8日(土) 南京大学趙教授による特別講義

- Economic Reform: The Change of Structure -

報告者: 小寺雄一

プレゼン概要

< 市場開放政策 >

- ◆ 1978年に中国はトウ小平の指導の元、海外に対して市場開放を行なった
- ◆ 2001年に中国はWTO加盟を契機に本格的に市場経済へ移行した
- ◆ 市場開放の成果として、中国人民の生活が豊かになった
- ◆ 平均年収は年10%の割合で増え、平均寿命は72歳になり、先進国と同じ水準に達した
- ◆ 外貨準備高は2007年で1兆4300億ドルに達し、世界一となった
- ◆ 高度成長を続ける中国が直面する問題は、都市と農村の格差問題、法の整備、インフレ対策などが挙げられる

< 構造改革 >

- ◆ 市場開放前、中国は社会主義経済であり、経済活動はすべて政府によって管理されていた
- ◆ 当時の中国の人事制度の特徴として、「鉄椅子」(画一的な昇進制度)、「鉄飯碗」(潰れない国営企業)、「大鍋飯」(馴れ合いの企業体質)が挙げられる
- ◆ また、人口の流動性も戸籍制度によって中国政府がコントロールしていた
- ◆ いまでは、中国は政府による経済活動のコントロールを抑える方向で構造改革を進めている
- ◆ 今日では、たくさんの国営企業が民営化され、大学生の就職はこれまで政府による就職の保証がなくなり、大学生は卒業後、自分で仕事を探さなければならない(大学生の就職率は6割と低い)
- ◆ 構造改革の成果として、規制が緩和され、中国に投資する外国企業(多国籍企業)が増えている

感想

- ◆ 市場経済に移行した中国の急激的な経済発展は目を見張るものがある
- ◆ 一見、華やかな高度経済成長の裏には、貧富格差問題、労使問題、環境問題、バブル経済などの問題が潜んでいる
- ◆ 中国政府は健全な高度経済成長を維持するため、いろいろな政策を打ち出し、改革を行なう姿勢が感じられる
- ◆ しかし、13億の人口を抱える大国を統治し、金融リスクや原油高などで目まぐるしく変化する市場経済の中での舵取りは、繊細さと大胆さの両方を兼ね備えることが求められる
- ◆ 中国政府の舵取りと、中国経済の行方に注目したい

3月8日(土) 九州大学出頭教授による特別講義

- International Marketing with Cross-Media -

報告者: 晏興隆

報告者の都合により、報告書を作成することができませんでした。

南京大学 HRM#1 チームによるプレゼンテーション(報告者:田中理絵)

テーマ: Human Resource Management

発表者: Leonard Zhu, Leon Xu, Henry He, Summer Jiang

【HRM History】

アジア、特に中国では、技術などに目がいきすぎてしまい、ソフト面である HRM についてはほとんど何も行われてこなかった。

【Employee Management】

日本の HRM の特徴についてパナソニックの事例を踏まえて中国側の視点から発表。

- 従業員への教育に非常に力を注ぎ育てていくという方針
- 仕事においてもプライベートにおいても密な人間関係がある
- 終身雇用がメインであり、解雇はほとんどない
- 年功序列であり、昇進が遅い
- 100%の人間より70%の人間を好む(教育しやすい)
- 会社の文化を共有できない、社員の友人や親族等の雇用は行わない

中国の HRM の特徴

- 友人や親族の雇用を積極的に行う
- 個人の能力を重視
- 教育について積極的に取り組み始めた
- ジョブローテーションを行う
- 有名大学からの優秀な人材を雇用する

【Time Management】

日本の Time Management について、非常に厳しいというイメージを持っている様子。

上司は部下の行動について細かく把握しており、部下も報告を怠ることはなく、また、上司の許可がない限り離席できない等。

中国の Time Management について、タイムカードでの管理等は日本と変わらないが、細かいスケジュールについては決定されておらず、ペナルティ制度や淘汰制度など日本には無い生存競争の厳しい制度がある。

【Payroll Management】

日本の給与体系である年功序列の説明。日本の場合、ベース 70% (年齢、社歴) + プレミアム 30% (実績) などが給与の基本となっている。中国の場合、日本とは逆にベースが低く、プレミアムが高い給与体系となっている。また、働けば働くほど給与を貰えるという体系になっている。

【Employee Benefit】

中国と日本の福利厚生についての説明。ただし、発表者が外資系企業の勤務のため、その会社の福利厚生についての説明であったため、かなり西洋的な要素が含まれている。

両国とも福利厚生については社員の確保と生活の質の向上のために、重要だと考えている。

日本と中国の基本的な福利厚生は同等。

基本 - 厚生年金、失業保険、健康保険など

日本の特徴的な福利厚生

日本の追加的な福利厚生 - 年休、様々な種類の休暇(失恋休暇)住宅ローン補助…

中国の追加的な福利厚生 - Job Share, パートタイム制、ストックオプションなど…

【質疑応答】

Q: 中国側のプレゼンで離職率を下げる努力をしているとありましたが、具体的にはどのようにして離職率を下げたのですか？

A: 従業員の大きな不満の中に、自分が身につけたい技術を身につけられないということがあったので、教育環境を充実させました。

Q: 従業員にとって給与と教育、どちらが重要ですか？

A: もちろんサラリーも重要です。幸いにも給与は他社に比べ既に高いので、当社では教育が重要だと思っています。

Q: ただスキルを身につけさせるだけでは、離職率3%はキープできないのでは？

A: 高い給与、教育、以外にも頻繁にキャリアプランについての研修があります。またそのための部署もあり、希望者は常にそこで自分のキャリアプランについて相談し検討することが可能です。

【所感】

労働人口が多いため、競争が激しく、社員にとって給与が一番のモチベーションであり、会社にとっては効率が一番であるため、自然淘汰システム等非常に厳しく、福利厚生については遅れているのでは？という勝手な思い込みがあった。学生の勤務先が外資系企業というのが起因しているのかもしれないが、思った以上に従業員への教育に力を入れ始めているということがわかり、興味深かった。先方の調査で日本の女性には失恋休暇という制度があるという発表があり、QBS側では誰もそのような事例を知らなかったが、ネットの調査だけでは誤解が生れる事を実際に体験した。また、外資の良い部分と中国の独特の文化がまじりあい、中国版 HRM が確立していく過程を見た良い機会であり、非常に興味深かった。

QBS-HRM チームによるプレゼンテーション(報告者:永池明日香)

テーマ: Introduction of Japanese HRM especially in the field of Manufacturer industries

発表者: 小寺、田中、魯、晏、永池

< 目的 >

終身雇用、年功序列、労使問題が日本的経営の三種の神器と言われてきた。高度成長とそれに続く 1980 年代、日本企業の台頭により、多くの欧米企業が日本的経営に注目し始めたが、90 年代低成長に遭遇し、国際競争が増す中で、年功制の見直しと成果主義の導入が進み、日本企業は人的資源管理において進むべき道を模索している。そんな日本の人的資源管理について、競争社会で生きている中国の学生はどう考えるのか、意見交換をしたいと考えた。

< 伝統的な日本の人的資源管理の特徴 >

伝統的な日本の人的資源管理の特徴として、終身雇用、年功序列が挙げられる。日本も 1900 年代初頭は短期的な雇用が主だったが、労働力の確保、国の政策転換などにより、終身雇用が推進されるようになった。終身雇用、年功序列のよい点として、雇用の安心感、同じ会社で長く働こうというモチベーションが高まる、チームワークの促進などが挙げられ、また悪い点として、能力のある社員や若い社員のモチベーションの低下、上司に NO といえない、自己犠牲などが挙げられる。インターネット調査によると、年功序列と成果主義のどちらを選ぶかという質問への回答(32000 人を対象)は、52%が成果主義、48%が年功序列を選ぶという結果が出ている。また、終身雇用についてどう考えるかという質問に対しては、年々重要視する人たちの割合が減り続けている。しかし、日本においては、終身雇用が基本という企業が 7 割近くを占めているのが現状である。

終身雇用、年功序列を効率よく進める仕組みとして新卒採用という採用方法が日本では一般的である。4 月に一括で採用するシステムであり、良い点として、社員を 1 から育てることができる、定期的に人を採用できるなどが挙げられ、悪い点として、景気に左右される、採用に時間やコストがかかるなどが挙げられる。近年採用方法も多様化しているが、いまだに多くの企業は新卒採用を重視しており、日本での採用方法の特徴といえる。そして、職務経験のない新卒を採用することから、特に大企業では、定期的なジョブローテーションを行うことが多い。また、社員の近い関係も日本特有である。仕事後の飲み会、社員旅行、スポーツ大会などの行事、結婚式での上司のスピーチなど社員同士が密なつきあいをしている。特に日本企業では、仕事後の飲み会は社員のコミュニケーションの場として重要視されている。さらに、日本では社員を評価する際に、結果より過程を大切にし、残業など勤務態度を重視する傾向があることも特徴的である。

< 日本の製造業における人的資源管理の現状 >

~ キヤノン ~

キヤノンは、以下の三点をモットーに終身雇用を維持し続けており、高い技術力を持つ優良企業である。

自前で「人づくり」をしない企業は滅びる

人材への長期的な投資: 技術が企業文化として定着するまでには長い時間を必要とする

企業への忠誠心: 仕事に「生きがい」や「やりがい」を持たせ、企業に定着させることが重要

～富士通～

富士通は 1993 年に成果主義に基づく評価制度を他の大企業に先駆けて導入した。当時の富士通は大手ながら先取りの気風に富む企業として知られており、富士通らしい行動として期待と注目を集めた。しかし、実際に導入してみると、対象にされた社員が総じて評価の低下を恐れて慎重になり、チャレンジしなくなるため意欲的な新技術やアイデアが生まれにくくなった、品質管理・アフターケアなどの成果に反映されにくい業務が疎かになったためにトラブルが増えたなどの弊害ばかりが増える結果になった。また、結果ばかりを重視することや評価の難しさなどが社員のモチベーションを低下させ、企業文化上の摩擦や個人主義の蔓延が社内風土の荒廃にもつながった。さらには、個人にかかる負担が増え、過労死や自殺者まで出してしまう結果となり、2005 年から成果主義の見直しが始まっている。

< 中国企業の人的資源管理の特徴 >

短期的な雇用、徹底的な実力主義、競争主義である。そこから実力のある人となない人による格差の問題、労働者紛争などの問題点が出てきている。今後世界の工場として、中国の製造業が発展していくためには、コスト競争だけでなく、技術力が必要になってくる。そのためには技術を持った熟練工が必要であり、長期的に社員を育てていく体制づくりが求められる。これから中国が発展するためには、人的資源管理も変わっていく必要があるだろう。

< 所感 >

今回日本の終身雇用、年功序列を中心に発表したため、発表後の質問が、日本的な人的資源管理の問題点などに集中するかと考えていた。しかし、実際中国の学生が一番興味を持っていたのは日本企業の社員同士の近しい人間関係について、つまり仕事後の飲み会のことについてであった。欧米的な考えを持っている中国の学生にはあまり理解ができなかったようだ。実際、勤務時間外に会社の仲間と飲みに行くことはあっても、お祝いごとの時くらいで、年に数回ということに驚いた。また、中国の学生たちにとっては、「ないものはとってくれば良い」と考えが普通であり、企業が社内で人を育てることの重要性をあまり感じていないようだった。日本では会社独自の技術や能力は社内で培うものであり、ヘッドハンティングなどはそれほど主流ではないということも聞いて納得していないように見えた。確かに M&A やヘッドハンティングで技術を買うことはできるかもしれない。しかし、やはり製造業はそれだけでは新たな製品やイノベーションを生み出すことは難しいと思う。中国企業においても、今後企業が発展するためには、技術や知識の蓄積は重要であろうと感じた。

南京大学 HRM#2 チームによるプレゼンテーション(報告者:田中理絵)

テーマ:HRM in Chinese and western Enterprise

発表者:Zhang Yi, Chen Zhe, Yu Mengqiu, Melanie Meyer, Wang Ning

【中国企業】

中国では企業は以下の4つに分類される。

株式会社 国有企業 外資系企業 個人企業

国有企業や外資系企業が大卒の主な就職先となっている。

中国と欧米企業の相違点について

- 会社内に中国共産党部署があり、企業の人事に影響している
- 機能はほぼ同等

中国のホワイトカラーのモチベーションについて

- 給与より高い数値で、Work life balance、環境など欧米的な考えや、リーダー、やりがい等があげられた。

【欧米企業】

中国、特に南京はドイツ系の外資企業が多く、今回発表した生徒の一人も外資企業に勤めており、中国の外資企業でのHRMについて説明があった。

説明によると、企業のHRMで重要視されている一つがリーダーシップであり、その評価方法も目標管理制度、複数の方向からの評価やフィードバック、モラルバロメーターなど様々なツールを使って行っているとのことであった。また、3つのレベルに従業員を分け、そのキャリアプランを常に相談できるスペースを設け、各人のモチベーションや能力向上を行っている。

【China Telecom(CT)の事例】

China Telecom:2002年NY市場に上場。国内最大の固定通信会社。

各国の電話通信事業会社の中で、CTは従業員の数に対しての1人あたりの利益が低い会社である。このような状況は中国の国営企業では珍しくなく、この問題を解決すべく複数のHRMツールを利用して効率をあげようとしている。

例)職業訓練、評価にあった役職の配置、業績評価、キャリアマネジメントなど

今後、中国が国際社会で勝ち残っていくためにも、中国でのHRMは大きく発展していく必要があり、実際発展していくとの意見が述べられた。

【Baosteel社の事例】

Baosteel社(上海宝钢集团公司):1998年設立。中国最大の鉄鋼会社で国有企業。

1978年上海沿岸に新日本製鉄の協力のもと、その当時の最高性能を持つ製鉄所を建設。

運営を行うにあたり、1985年に新日本製鉄より管理ツールを\$8.9Millionで購入し、中国での運営に適したものに改良を加えていった。その後、6シグマや、人的価値管理などを取り入れていった。またこのようなマネジメントはITの進歩によりERPなどで管理するようになった。このように、国外から購入したシステムに、自国、自社のルールに適用させ改善し、新しい技術を多く取り入れ

ていくことで、Baosteel 社は同業他社の良い事例となり、広く取り入れられている。

【所感】

中国国営企業と外資企業で働くメンバーの発表がかなり異なっていたことが興味深かった。やはり、国営企業は思想的にも国の影響が未だに強く、他国に比べ一人当たりの利益が低いなど、私がかもっていた印象とあまり相違ない部分もあったが、同じ国営企業でも Baosteel 社は斬新的な試みを行っており、業種によっても相違があると感じた。外資系企業については、想像以上に根付いていたので実際驚いた。日系企業が進出した場合、全て日本式でやろうとするが、なかなか受け入れられないという話をよく耳にしていた。実際、以前日系企業に勤めたことのある学生は、日系企業は「ケチ」「現地スタッフへの権限委譲が小さい」などといった認識であり、日系企業では勤務したくないというのが正直な意見だった。すでに欧米である程度確立された HRM が外資系企業を通じ中国に入り、そこから国内への権限委譲が行われ、中国式の HRM は急速に発展しつつある。この中国式が Baosteel 社のように、他の国営企業にも取り入れられ、中国の発展はさらにスピードを増すのではないかと感じた。

QBS 高度成長チームによるプレゼンテーション(報告者:松本幸博)

テーマ: Effect of Rapid Economic Growth

~Environment Consideration and Business Opportunity~

発表者: 花田、富松、鶴田、シャズ、張、松本

1. 目的

日本・中国ともに第1回目のオリンピック・万博開催時期前後に高度経済成長を果たしており、多くの共通点が存在する。今回は特に環境問題を共通点としてクローズアップし、日本・中国において、今後どのように環境問題に対して取り組んでいくべきか、その方向性についてのディスカッションを行う。

2. 発表の概要

(1)日本・中国における高度経済成長

日本では1960年、池田内閣により今後10年間で国民総生産を倍増させようとする「国民所得倍増計画」が策定された。それ以降、日本は驚異的な成長を果たすこととなる。また、1964年の東京オリンピック、1970年の大阪万博は日本の高度経済成長を強烈に印象づけるイベントとなった。一方、急激な経済成長を背景に、ネガティブな面も多数存在していた。働き手が都会へと集中することにより、過疎化が進み、農家の高齢化という現象を生み出したのである。さらには高度成長により公害も各地で多発するようになった。日本の高度経済成長は「東洋の奇跡」と呼ばれており、国民の生活を大変豊かなものにしたことは間違いない。一方で、新たに発生した重大な問題が「公害」だったのである。

現在の中国においては、1960年代の日本に共通する点がいくつか存在する。労働力が都心に集中することによる過疎化は、現在の中国でも大きな問題となっている。また、「公害」についても当時の日本同様、深刻な問題となっている。

(2)日本における環境問題に対する意識の高まり

日本では、1967年に公害対策基本法が施行され、1971年には環境庁が設立されるなど、環境に対する国家の枠組みのもと、様々な取り組みが行われてきた。最新の環境白書には、その中で日本が果たすべき役割として3R(Reduce, Reuse, Recycle)を通じて天然資源の消費を抑制し、環境への負荷を低減する循環型社会の構築に取り組んでいくことが述べられている。この循環型社会構築のベースとなったのが、2005年に開催された愛知万博とあって良いだろう。愛知万博では、環境型社会の実現をサブテーマの一つに掲げ、様々な取り組みを行っている。すなわち21世紀の循環型社会を提示するために新しいエネルギー、リサイクル技術を活用し、開発と環境のバランスのあり方を追求し、あわせて環境の再生を試みるというものであった。

(3)日本における環境ビジネス、環境への取り組み(事例)

水質浄化ビジネス: 福岡県にあるコヨウ(株)は微生物を含むエコバイオ・ブロックの製造販売を行っている。このエコバイオ・ブロックは川や池のなかで、微生物による水質浄化システムを利用し、環境蘇生をサポートしている。現在では世界の数カ国で利用されている。

環境私募債: 福岡県にある西日本シティ銀行における融資の一種。ISO14001や、エコア

クシオン 21 などの認定がある企業は、通常の社債に比べ、クーポンや保証料の優遇を受けられることが出来る。また、発行企業は環境配慮の取組みを対外的にもアピールすることができ、IR 効果が期待されている。

「チームマイナス 6%」:日本では国家的プロジェクトのもと、国民ひとりひとりが環境配慮の意識を高め、取組みを行っている。蛇口をこまめに閉める、買い物はリサイクルエコバックを使用する、コンセントはこまめに抜く、など日常生活の中で行うことができることに取組んでいる。(ホームページ紹介)

(4)中国における環境への取組み

中国においても近年急速に環境配慮に対する取組が加速されている。具体的な取り組みとしては、2000 年から始まった社会経済発展の「十・五計画」に主要汚染物質排出の 10%削減という努力目標を採用した。2006 年に始まった「十一・五計画」では、努力目標をコミットメントに変え、この数値目標を達成するための削減責任を各省・市に割り当てている。地方政府も環境投資への補助金や優遇制度の導入を行っており、今後については環境対策への取組みに対するビジネスチャンスも益々大きくなると考えられる。

(5)環境配慮モデル地域の実現に向けて

中国が国家として環境配慮に関する枠組み作りに取り組んでいる中、我々としては南京が環境配慮型都市のけん引役としての役割を果たしていくことは非常に重要であると考え。そのためには、南京と九州が同じ経済圏に属する都市として、国の垣根を越えた人的交流や技術交流を深め、お互いが更なる発展をしていくことが必要であり、ここに南京大学ビジネススクールと九州大学ビジネススクールの更なる交流と活躍の場が与えられることになると思う。

3. 所感

今回のテーマは、特定企業に関するものでなく、「高度経済成長」という範囲の広いものであった為、当初は活発なディスカッションが出来るか不安もあった。しかし、プレゼンに先駆けて行われた Zhao 先生、出頭先生の講義の中で、日本・中国の経済成長についての説明などがあったため、ある程度参加者が事前に予備知識を持つことができた。

また、「環境問題」についてクローズアップすることによって、中国の学生にとっても身近な問題として活発な意見交換が行え、大変有意義なものであった。

南京大学高度成長チームによるプレゼンテーション(報告者: 花田真)

テーマ: Rapid economic growth in Japan in 1970 and in China in 1990

1. Brief introduction between China and Japan

日本の1970年代と中国の1990年代は高度経済成長に直面した時代である。それぞれの国がこの時代にどのような成長を果たしたのかを、GDP, GDP per Capital, Urbanization Level, Population, Area にカテゴリを分け特徴を説明。また中国の高度経済成長のけん引役となっている地域が、Costal Economic Belt と Yangtze Ricer Belt であるとの説明。

2. Figures and Data

1970年代の日本と1990年代の中国におけるGDP成長率及びinterest rateの移り変わり及び特徴の説明。

3. Economic Events

日本と中国の経済的なイベントについて比較を行いながら説明。具体的には以下の通り。

- 日本: 所得倍増計画 中国: 1978年に発表された“Reform & Opening” Policy
- 日本: 1964年東京オリンピック開催 中国: 2008年北京オリンピック開催
- 日本: 1964年新幹線開通 中国: 2006年CHR(China Highspeed Railway)
2010年北京-上海間 the Express Train 開通
- 日本: 1970年大阪万博開催 中国: 2010年上海万博開催
- 日本: 1950-1977年高度経済成長期 中国: 1978年-現在 高度経済成長期

4. The Differences and Commons

高度経済成長期における日本と中国の共通点と相違点につき説明。具体的には以下の通り。

- 共通点
 - ✓ 政府が経済政策を打ち出している。
 - ✓ 国際的なイベントが開催されている。
 - ✓ インフラ整備が活発に行われている。
 - ✓ 持続的な経済成長が行われている。
 - ✓ 環境問題が発生している。
 - ✓ 金融市場が大きく成長し、バブルのリスクが生じている。
 - ✓ US\$と自国通貨の関係においてアメリカからの圧力を受けている。
- 相違点
 - ✓ Innovation
日本ではソニーのWalkmanなど世界に通じるイノベーションが行われたが、中国では同様のイノベーションがあまり行われていない。
 - ✓ Brand
日本では世界的に有名なブランドが数多く輩出されたが、中国では世界的に有名なブランドがあまり輩出されていない。

✓ Industry structure

日本と中国の産業構造の違いを説明。具体的には以下の通り。

日本：

Resources Intensive Industry High end technology, Intensive Industry

中国：

Resource & Labor Intensive Industry 今後の展開注目。

5. New Information

中国の最新情報として、2008年3月8日に行われた第11回全国人民代表大会で発表された内容の紹介。

- 中国では2003年-2008年に65.5%(年平均で10.6%)の成長を果たした。
- 世界第4位の経済大国となった。
- 2007年のGDPはUS\$3.425trillionであり、政府歳入はUS\$712billionとなった。
- 現時点での中国の外国為替準備額はUS\$1.52trillionである。

6. 質疑応答

- 中国のバブルは崩壊する見込みか？
(回答)誰も分らないが、いまだに土地代は値上がり続けている。
- 日本企業のブランド力についてどう考えるか？
(回答)例えばトヨタの場合、トヨタというブランド力は高い技術力で支えられていると考える。ハイブリッドカーにしても、高い技術力が利益を生み出し、また環境に優しい製品を作りだしており、非常に優れていると考える。

7. 所感

南京大学のプレゼンテーションを聞いて、日本と中国の高度経済成長に関する認識に大きな差異は無いと感じた。ひとつ認識の差異を挙げるとすれば、我々が中国の高度経済成長期を2000年代と考えていたのに対し、彼らは中国の高度経済成長期を1990年代としていたことであろう。

北京オリンピックや上海万博を控え、中国は引き続き高度経済成長が継続されることとなるだろう。南京大学の学生からは、中国の持続的な高度経済成長には日本のような技術力やブランド力が不可欠であり、日本との更なる技術交流を期待するとの発言があった。私も同感であるが、ただ単に高度経済成長を目論むのでは無く、例えば公害問題等日本が高度経済成長期に経験した負の部分の二度と繰り返さないような、真の意味での持続的な経済成長に不可欠な、環境技術や都市機能の整備技術を移転する交流が今後発展していくことを大いに期待する。

ICABE 南京・上海見学レポート(報告者:鶴田竜也)

3月9日(日)9:00~11:00

南京大学 MBA の胡さんのご厚意により、ICABE 南京訪問3日目の午前中に「明孝陵」に訪れました。この「明孝陵」は、中国の南京の東にある紫金山の南麓に位置にある明の太祖洪武帝朱元璋と后妃の陵墓で、世界文化遺産に登録されている史跡。観光当日は休日だったということもあり、外国人観光客は少なく、圧倒的に中国人の観光客が多く、駐車場の出入りも混雑するくらいの人の多さで、すれ違ったガイドさんに尋ねてみると、地元でも人気スポットのようでした。「明孝陵」の入口付近では、観光客を音楽と踊りで出迎える演奏団もいて非常に賑やかな雰囲気。中に入ると一つ一つのつくりが非常に大きく、広大な敷地を有効に利用し、かつスケールの大きさを感じさせる設計でした。明の太祖の墓ならでは、いたる所に墓を守る石像が立ち並んでおり、また梅の咲き開く時期とも重なり、色彩豊かな印象を受けました。残念ながら上海への新幹線の乗車時間の都合上、観光途中で退出することとなったため、辛亥革命の英雄「孫中山(孫文)」の陵墓、「中山陵」を観ることはできませんでしたが、「明孝陵」の史料や史跡を観ることにより、南京の長い歴史を垣間見ることができ、有意義な時間を過ごすことができました。

3月10日(月)9:00~11:30

ICABE 南京・上海訪問の4日目。QBS4期生魯さんの案内で、上海「豫園」を訪問しました。「豫園」は、「外灘」と並ぶ上海2大観光スポットのうちのひとつで、上海に来た観光客はほぼ必ず訪れる場所だそうです。最初に足を踏み入れたのは、釘を使わない建築としても知られている「三稻堂」で「豫園」でも最も古い建物のうちのひとつでした。そして続いて現れたのが高さ12メートル余りで、上海から200キロ離れた浙江省の武康県から運ばれてきた武康石2000トン積み重ねられてきている「築山」、そしてその「築山」を眺める「仰山堂」、次に「複廊」と呼ばれる二重廊下があり、その廊下を抜けると1843年に再建されたという建物が「万花楼」。「花でいっぱいである」という意味で作られたもので、庭に立つ銀杏の木は豫園設立当初からあると言われ、樹齢は400年を超える立派な樹木でした。そしてさらに圧巻だったのは、万花楼のそばの壁上部、龍で装飾されている「龍壁」。龍は皇帝の象徴であり、臣下は龍の装飾を用いることが禁じられていたそうなのですが、本来の5本あるべき龍の爪を、4本にすることで咎められる難を逃れたそうです。その後、上海「新天地」へ場所を移動し、中国共産党発祥の地などを見学し、観光スケジュールを終えました。「豫園」周辺では、上海のダウンタウンをタクシーで移動中に観ることができ、そのすぐ近くで高層ビルディングの建設ラッシュが行われており、中国の新旧を身近に感じた、非常に印象深い観光となりました。

ICABE 南京・上海見学ツアー報告書(報告者:張碩秋)

上海の観光名所と言えば外灘(バンド)である。南京から中国版新幹線で上海に到着したあと、夕食までの2、3時間の間を利用して皆で外灘に向かった。南京路を抜けると長江の支流である黄浦江が道をさえぎるように流れており、目の前に広がる景色に皆が思わず感嘆した。川の向こうは林立する高層ビルが密集しており、手前に流れる黄浦江と織り成すモダンな景色はまさに現代上海の象徴そのものであった。その景色を記念に収めようと、川岸は付け入る隙間がないほど写真撮影の観光客で埋め尽くされていた。街に向かうと、旧租界時代に建てられたヨーロッパ風の建築物がライトアップされて、まさに不夜城のごとく、昔と変わらない雰囲気を残している。今回の ICABE で初めて中国を訪問したひともあるので、ひとの喧騒と新旧の建物が川を挟んで相対する外灘の風景を目の当たりにして、きっと中国や上海に対する印象を新たにしたに違いない。

翌日、皆で豫園に行った。上海は躍動する大都市という一面のほか、歴史的な観光スポットがたくさん残る由緒ある街という一面も持っている。豫園は明の時代の役人が建てた庭園であり、中に入ると、古代中国のライフスタイルや文化・芸術を体感することができた。ちょうど梅の季節であり、庭園の中には色取り取りの梅の花が飾られていた。典型的な中国庭園が梅の花で彩られ、計算された景色がより一層華やかさを増した。

このほかに、上海市内の新天地でQBSの卒業生や交換留学生と再会できたことがとても印象に残った。活気ある上海の街を移動し、そこで活躍されている先輩たちと交流できたことは、まさに ICABE ならではと思った。このような交流を通じて、日中間の人的ネットワークを広げ、日中友好を促進する ICABE であり続けて欲しいと思った。

ICABE学生交流プロジェクト 感想文

学生感想文(敬称略、あいうえお順)

4期生

晏興隆	22
Shazlinda Md Yusof	23
魯近	25

5期生

小寺雄一	26
田中理絵	28
張碩秋	29
鶴田竜也	30
富松寛考	32
永池明日香	33
花田真	34
松本幸博	35

ICABE 南京に参加しての感想

氏名 晏興隆(4期生)

報告者の都合により、報告書を作成することができませんでした。

Overall Impression

By Shazlinda Md Yusof

This was my first and last participation in ICABE program, the moment I had been waiting for nearly 2 years since I entered QBS. My last visit to China was 8 years ago which was merely for sightseeing so this time I wanted to see the difference of the “new” China especially towards Beijing Olympics 2008 and at the same time observe the business culture of the people in the country. Since the students participating in this program are divided into teams to present at Nanjing University, this was also a perfect chance for me to get to know students from the 5th batch more, whom I seldom meet at school.

We landed at Pudong Airport, Shanghai at noon and moved to Nanjing by bus. What surprised me during the journey was the extreme gap between the rich and the poor. There are beautiful and modern houses near Shanghai but as there are also houses made of thrash along the way to Nanjing. The first place we visited when we arrive in Nanjing was a company making terminals, Phoenix. Later, we head for the venue for dinner, where Prof. Zhao of Nanjing University was waiting. The dinner was also a birthday party for Prof. Shutto who celebrated his 60th birthday on the same day. This was also the first time I observed Chinese “kanpei” culture. Different from Japanese, the Chinese do not exchange seats but the host or the greater person will move around to check with the lower rank ones. On the other hand, the lower ones will invite the higher person to drink.

After dinner, we checked-in at the hotel. My team, the Eco Team, then gathered to prepare for the presentation tomorrow. Everybody was tired because we had a long 5-hour journey from Shanghai, a factory visit and dinner continuously but the cheerfulness of the group members really powered the night. We really laughed our hearts out. They even promised to accompany me to have breakfast outside of the hotel tomorrow morning because my diet is limited.

The next morning, we stroll down the town where I suddenly saw a small restaurant with Arabic letters written on its signboard. As we approached the shop, I saw a “halal” sign written in Chinese. I never thought that I would find such restaurant here! After confirming that the chef is a Muslim, we went in and enjoyed various kinds of Chinese noodles. Later, I found out that there are about 50,000 Muslims in Nanjing and many of them are involved and successful in catering business. The shop that we went actually has other chain restaurants in other places.

The visit to Nanjing University was very fruitful. Our visit was welcomed by Apart from listening to lectures by Prof. Zhao and Prof. Shutto, there were also presentations by the MBA students of Nanjing University. Our team's presentation wrapped up the presentations from QBS. We were then brought on a visit to the hotel at the upper floor of the faculty building. The rooms which are managed by Mandarin Oriental Hotel are offered for visitors to Nanjing University at a reasonable price. The university also has a Chinese restaurant offering a wide variety of menu to entertain guests, where we had dinner on the second day. These are innovative ideas which I believe originate from the Chinese culture itself.

On the last day, after a short sightseeing trip in Nanjing, all of us head for Shanghai by the bullet train. Then three of us, Suthep, Hanada and I split up with the others at Shanghai Station to head for home. We spent some time at the busy and vibrant Nanjing Road and Shanghai tower vicinity guided by Yan before riding on the linear train to Pudong Airport. We were so excited to witness the increasing speed of the train to maximum 141km/h!

The experience in Nanjing and Shanghai is very precious to me. I wish to extend my thanks to friends in Nanjing University and Chinese classmates who accompanied us through the visit. Thanks also to the cheerful Eco Team members who had made the journey more colorful and fun.

ICABE 南京に参加しての感想

氏名 魯近(4期生)

3回目のICABEは前2回と同じように自分にとって非常に意味のある経験である。

南京は自分の出身地の上海に近いですが、実はこれまで一回しか行ったことがない。9年前の一回目の訪問に比べると、確かに街並みはかなり変わってきた。特に車の数は以前よりずっと多くなり、マイカーの普及はかなりの交通渋滞を引き起こしている。しかし、発展している一方、環境の汚染も酷くなっている。福岡から上海に帰るたびに、空が灰色に見え、町も福岡よりずっと汚れているように感じているが、南京のほうが上海よりさらに深刻な状況になっている。経済発展に力を入れる一方、政府や企業、そして、市民の一人一人は環境のことをもっと配慮しないと、近い将来に大変なことになると思う。

南京大学は中国において非常に有名な大学であり、そのビジネススクールは中国でも有数のビジネススクールである。今回の交流を通して、やはり英語能力においても、専門知識においても、南京大学の学生のレベルが非常に高く感じた。特に、物事に対してははっきりした自らの考えを持ち、自信を持ってその考えを伝えることができる点は非常に感心している。日本人が個人より集団に従って行動すると違って、中国の学生は積極的に自分をアピールしている。どちらがいいか悪いかと一言で判定できないが、ビジネススクールの学生として、積極的に自分をアピールすることはやはり必要だと思う。

そして、南京大学の学校側と学生の熱い歓迎に感心した。スケジュールの調整、車の手配、企業訪問先の選定などあらゆる方面において十分に気を使ってくれて本当に感謝している。南京大学は多くの優秀な学生がいるので、これからもQBSと南京大学との交流はきっと何か大きな収穫になると確信している。

以上

ICABE 南京に参加しての感想

氏名 小寺雄一(5期生)

今回は2回目のICABE参加であるが、南京を訪れるのは今回が初めてである。前回の北京はオリンピック開催を控えていることもあって、あっちこっちで建設ラッシュに沸いており、市内は慢性的な交通渋滞で街が車で溢れ返っていた。「喧騒の街」北京と比べると、今回の南京は落ち着いた街という印象を受けた。中国4大古都にひとつに数えられる南京市は、市内に多くの古跡名所が点在し、よく手入れされた城壁、寺院、庭園の存在感は、街全体に落ち着きと威厳を与えている。

私にとって意外なことではあったが、南京市の市街地や観光スポットは思いのほか綺麗であった。特に3日目に行った明孝陵(明朝皇帝朱元璋の墓)は、世界遺産に指定されたこともあり、よく手入れされており、多くの観光客が行き交う通路にはゴミひとつ落ちていなかった。実は、同様の現象が上海でも感じられた。恐らく、オリンピック・万博を控える中国は、街の浄化によるイメージアップを強化しているためと思われる。実際、ひとが集まる場所では、腕章を付けた清掃員がよく見かけられた。

今回の旅は、上海～南京間を陸路で移動したため、中国の交通インフラを直に体験することができた。往路は上海浦東国際空港からマイクロバスに乗り換えて、南京を目指して高速道路を延々と走り続けた。長時間の走行でかなり体力を消耗し、途中から車窓風景を楽しむ余裕がなくなったが、よく整備された高速道路をずっと走っていると、ここは中国であることを忘れてしまうほど快適なドライブだった。復路は中国版新幹線「諧和号(シェーハーハオ)」で南京から上海まで移動した。「諧和号」は日本の新幹線技術を使っているため、乗り心地は快適そのものであった。交通網は産業の動脈と言われるほど重要な社会インフラであるが、いまの中国は、少なくとも大都市をつなぐ交通網は日本並みに整備されつつあることを実感した。

南京では、日中間のサブカルチャーにおける交流を垣間見る出来事に遭遇した。3日目の市内観光で明孝陵を見学した。帰りに、映画の撮影かと思わせる綺麗な中国古代の民族衣装を着た若者の一団とすれ違った。一団は皆それぞれ思い思いの民族衣装を着て、頭からつま先まで民族衣装で統一するほどのこだわりであった。当初、この集団が何であるか分からず、日本語で“きつと、これは「コスプレ」か、なにかだよ!”と何気に会話をしているところ、民族衣装の一団の中から、ひとり真顔で我々に近づき、中国語できっぱりとこう説明した。“我々は中国古代の民族衣装を現代に復活させるために活動しているのであって、「コスプレ」ではない!”(注:「コスプレ」だけは日本語の発音であった)

南京市は歴史的にも、幾つかの王朝時代では政治の中心であったことから、北京と並んでナショナリズムが強い地域と言われているので、若者の活動は至極当然のように感じられた。しかし、この出来事で何より驚いたのは、沿海の経済開発特区から少し離れており、政治的または歴史的背景から保守的と言われる南京市において、日本語が話せない若者でも「コスプレ」という言葉を知って

いたことである。マイナーな分野であるはずのサブカルチャーにおいて、「コスプレ」という単語が日中の若者の中で共有されていることは、報道されている日中間の価値観の衝突とは裏腹に、両国間の文化交流が着実に浸透していることを表しているように思えた。

以上

ICABE 南京に参加しての感想

氏名 田中理絵(5期生)

気になるけれども、ちょっと怖いというのが私の中国への率直なイメージだった。直前に発覚した毒入り餃子問題や、大気汚染、反日感情、鳥インフルエンザなどなど。しかし、今は参加して良かったと感じ、また機会があれば参加したいと思っている。

大学の講義では、優秀な中国側の学生の発表を聞き、個人のレベルの高さを感じた。しかし、グループのストーリーとしての発表内容となるとQBSのほうがまとまっていたと思う。今回のグループディスカッションの中で強く感じたのは、本やネットの知識にはやはり限界があり、実際に体感することが重要だということである。先方のHRMの発表に中で日本の福利厚生は充実していて、失恋休暇というもある。という発表があった。後で調べてみると実際に制度を持っている会社はあるにはあったが、それは日本の会社の特徴では決していない。また、私は中国の人にモチベーションは給与が突出しており離職率が高いと思っていたが、離職率を下げるために教育に力を注いでいる会社があったりと、実際に会って話して聞いてみることの重要性を感じた。

今回の反省点としては、ディスカッションの際に積極的な参加ができなかったことである。実際に話すことの重要性を認識しておきながら勇気がない自分に反省し、今後の課題にしたい。

大学でのディスカッション以外にも、今回は上海の街を歩く時間があった。これも本当に良い体験だった。渋谷の交差点を思わず人ごみ。しかし、どの人もエネルギーに満ち溢れていて、今の中国の勢いを肌で感じる事ができた。夜遅くまで賑わう町、タクシーがなかなか捕まらない週末、人ごみに疲れたので地下鉄に乗ろうとしたら、券売機が大行列で乗る気をなくした事、その場所にいるだけで圧倒される雰囲気を生まれて初めて体験し、日本が追い抜かれるのは時間の問題だろうと根拠はないけれど感覚でそう感じた。

そのようなエネルギーと一緒に、中国の問題点もいくつかみることができた。上海市内の大渋滞と空気汚染、本物とコピーが同じショーケースで販売されている電化製品店など。

今回のICABEでは、頭だけでなく体全体で中国の今の吸収できた貴重な体験であった。この貴重な体験の機会を与えてくださった大学、工程をともにした先生方、かけがえのない体験を共有することができた同窓生に感謝したいと思う。

以上

ICABE 南京に参加しての感想

氏名 張碩秋(5期生)

どこから書き始めたらいいのかと、本当に今の気持ちのままでした。プレゼン準備のため、前夜2時くらいまで皆頑張ったシーンか、南京大学の会議室で盛り上がったディスカッションか、先生たちが心血を注いだ素晴らしい講演か、工場見学に行った皆の姿か、それともレストランで南京大学の教授や学生たちと酒を飲みながら歓談する笑顔か、バスやバーで皆の会話の中の笑いか、歴史の陵園を散策して見かけた伝統的な民族衣装を着た中国人団体か、思わず様々なシーンが一気に目の前に浮かび上がった。確かに短い3泊4日間だけれども、振り返ってみると、実はたくさんのことがあり、かなり中身の濃い交流活動が行われていたなと実感した。

南京大学の立派な会議室で、環境問題や人的資源について、チームそれぞれ発表した後に、盛んなディスカッションが行われ、さらに南京大学の学生を加えて、様々な視点から議論が行なわれた。

さらに、南京大学趙先生の招待で開催された夜の懇親会では、ちょうど出頭先生の60歳の誕生日ということもあり、皆が一緒にお祝いしたとともに、風発歓談の中で、話し合ったり、前の交換留学生と再会したり、現地の事情を聞いたりといろいろと盛り上がった。

その他にも数多くの思い出があり、これらの活動を通じて、本当にすごいなと何回と耳にして、やっぱり皆が肌で中国の急速発展の勢いを感じたのではないかと思った。南京であれ、上海であれ、ともに中国の大都市なので、高層ビルが立ち並び、朝早くから道に人が溢れ、車やバスで道路は慢性的な渋滞が続き、本当に中国は活気にあふれ、発展しつつあると実感した。特に北京オリンピックに向け、街全体として、躍動感があり、交流の中でも、さすが中国だなとか、やっぱり違うね、と言った感想をICABE参加メンバーから聞かれた。

確かに、今回のICABE活動は、皆が中国の急速的な成長のど真ん中に入り、議論をはじめ、いろんなことを通じて、交流したり、体験したりして、ICABEメンバーと南京大学の学生たちと相互理解を深めることできたのではないかと思う。短い期間だが、本当の交流は勿論これで終わりではなくて、南京大学の学生たちや交換留学生との再会できたように、ICABEだけではなく、いろいろな交流を繰り返すことで、きっと日中間の関係はもっといいものになるのではないかと実感した。

以上

ICABE南京に参加しての感想

氏名 鶴田竜也(5期生)

初めての中国、訪中の前後で私の「中国」に対するイメージやこれまでの印象が一変した。まず今回の日程を整理してみる。訪中初日に福岡空港から上海浦東空港へ移動、窓越しに見える着陸寸前の光景は、肥沃な大地がどこまでも続く豊かな田園風景で、降り立った瞬間には濁った空気から中国の急激な発展・開発による大気汚染を感じた。そして上海から南京まではバスで約5時間の移動となったが、経路上上海の市街地を抜ける形になり、その圧倒的な車の数と、高層ビルディングの数々、そして金曜の午後ということもあり大渋滞。まさに上海の熱気を感じることができた。その後、延々と続く高速道路を抜けて、南京市に到着。予定の時間を1時間ほど遅れて南京のドイツ系企業フェニックスコンタクトの工場見学を行った。ここでは産業用電子機器や工業用プラグコネクタを製造する工場の設備を順に見学し、遅刻でご迷惑をかけたが南京大学MBAOBの方が快くプレゼンを行ってくださり、外資系企業と中国が時間をかけながら、じっくりと融合していく様が垣間見えた。

2日目はICABEのメインイベントである南京大学MBA生とのテーマ別ディスカッション(高度経済成長・人的資源管理)、これまでに1ヶ月以上前から日々の業務の合間に打合せを行い、それぞれのテーマの下、南京大学の彼らに負けじと時間を費やして、前日の夜中2時すぎまで事前準備を行っていた。その結果、非常に満足いくプレゼンで高い評価も頂いたが、その反面ディスカッションでは伝えたいことを伝えられず英語のコミュニケーション能力の乏しさを痛感した。その後忙しい合間を縫って行って頂いた南京大学からの温かいおもてなしの数々も非常に感銘を受けた。

3日目は南京大学MBAである胡さんの案内による世界遺産「明孝陵」を訪れたが、タイトなスケジュールの中を調整していただき、歴史的価値の高い明の太祖洪武帝朱元璋と后妃の陵墓を見学することができた。その後日本では考えられないほど大きな南京駅へ向かい、胡さんとの別れを惜しみながら、中国新幹線で(わずか2時間で)上海へ移動し、夕刻上海での九大ビジネススクール(以下QBS)OBの方々、QBS在校生、九大OBとの親睦会が催された。

最終日(4日目)は上海観光として「豫園」および上海新天地など新旧の名所を訪問し、午後はリニアモーター(最高時速431Km!!)で上海空港へ移動、帰国の途についた。

今回のICABE参加を振り返ってみると、私にとってはすべてにおいて最も刺激的でかつ新鮮な4日間だった。2007年10月から2008年2月までQBSへ訪れた交換留学生(胡さん・エデン in 南京、リーシャ in 上海)との再会、特に胡さんは今年の2月のQBS交換留学から帰国して南京大学MBA職員となられて、今回の南京ICABEへの何から何まで温かい心遣いを頂き、感謝の一言に尽きる。これらの人的交流、都市部から周辺部に続く建設ラッシュの数々を見て、聞いて、話して、食べて、「多様性」と「グローバルゼーション」の真っ只中にある「中国」という巨大なものを身をもって感じる事ができた。これまでに伝え聞いた中国、北京オ

オリンピックを控えた中国、さらに発展し続ける「中国」、今度はさらに自分自身の能力や価値も高めて、また改めてトライしたいと感じた。そして、これらのICABEもQBSの先生方、先輩方の功績なくして語れず、事務局の方々、関係者の皆様に対して深く感謝の意を表したい。

以 上

ICABE 南京(南京大学)に参加しての感想

氏名 富松寛考(5期生)

今回2泊3日の短い日程ではあったが、今回が自身初めての訪問となった中国で、成長著し中国の現状とエネルギーで潜在的なマーケットの凄さを身をもって体感することができた。仕事上でもなかなか接する機会もなく、ただメディアからの情報でしか想像していなかった中国を訪問できた喜びと同時に ICABE の意義とその素晴らしさを実感できたことは自身にとってプラスであった。帰国後時間は経ってもすべてが鮮明な記憶として残っている。

限られた時間の中での企業訪問では、海外資本でありながらマネジメントのほとんどを中国側で行っているグローバル企業の適応化における現地化を実際に見ることが出来たが、それ以上に施設内各所に『易経』が掲げられていたのは、これも一つの現地化と感心する一方で、他の企業もそうなのかと別の部分でより興味を抱くものとなった。

南京大学訪問では、2,000 人という生徒数だけではなく、最上階には宿泊施設も備わりしかも卒業生の寄付によって建てられたという、ビジネススクールが入る高層建築物に驚かされ、卒業生の凄さを実感した。学生間でのディスカッションによる交流では、発表まで相手に受け入れられるか不安ではあったが、実際は彼らが高い関心を示したことでそれまでの準備段階を振り返り安堵を覚えた。ただ、数字から捉える経済成長ではなく、環境などもっと社会全体を考えた上で底上げさせた成長への取り組みでの彼らとの問題意識の違いを実感したが、ディスカッションを通じ多くの交流が図れ、活発に意見交換ができたことは意義深かった。

とにかく今回は強行スケジュールであったため、ゆっくりと観光とはいかなかったのが残念でもあるが、逆を言えば再訪の機会が出来たということで喜ばしいことである。ただその中でも、朝食を兼ねて南京市内を街歩きしたのは、実際の生活風景を目にするだけでなく、ジェスチャーで注文などのやり取りをするなどちょっと新鮮で、『通』になった気分で異文化を体感できた貴重なひとときであった。それ以外にも、帰りの南京から上海への新幹線での移動や僅か1時間の滞在の中で上海見物ができたこと、時速 431km のリニアモーターカーを利用した空港移動ができたことなど最後まで楽しい道中であった。

ICABE に参加しないと見えてこないものが多いことに改めて考えさせられ、限られた QBS 生活の中でまた機会をつくり参加したいと思った今回の中国ではあったが、今後の ICABE の展開として、在学中に ICABE に参加した者が修了後も何らかのかたちで再度参加可能となるような制度が導入されることを強く希望したい。

最後に、今回一緒だった参加メンバーへ感謝したい。

以上

ICABE 南京に参加しての感想

氏名 永池明日香(5 期生)

今回が私の初めての中国訪問だった。ICABE は父から話を聞いて、一度は参加したいと考えていた。今回実際に自分が参加してみて、やはり「百聞は一見に如かず」であると感じた。実際に行ってみなくては感じられないこと、発見できないことはたくさんある。

まず、上海の浦東空港に到着し、南京までバスで移動することになった。そこから見る初めての景色がとても新鮮だったが、5 時間以上ものバスでの移動は予想以上にハードであり、改めて中国の広さを感じた。現地化を推進し、中国にて急速に業績を伸ばしている Phoenix 社の企業訪問では、実際に工場を見学させていただきながらお話を伺うことができ、有意義であった。二日目、南京大学にて先生方の公開講義と各チームのプレゼンテーションが行われた。プレゼンテーションはなんとか無事終了したが、ディスカッションになると、まず頭の中で英語で何と言おうかということを考えてしまい、積極的に発言することのできない自分がひどく情けなく、ストレスさえ感じた。プレゼンテーションを聞きながら、南京大学の学生が捉えている日本は実際の日本と違っていたり、私たちが当然だと思っていることを南京大学の学生はおかしいと感じていたり、やはりその国によって考え方や文化の違いがあることが興味深かった。こういったことは実際に中国の学生と交流して初めてわかることである。しかし、ビジネススクールで学ぼうという向上心や熱い思い、懇親会で楽しく盛り上がっている時などは国境を越えて通じるものがあると感じ、それが嬉しかった。

今回の ICABE では企業訪問、南京大学の学生との交流はもちろん、南京・上海という二つの大都市を訪問し、更に上海ではいくつかの観光名所を訪れることができた。上海に着いてすぐ、南京路を歩いたが、その勢いには圧倒された。人の多さや熱気、あちこちに高層ビルが建ち並び、急速に発展している上海の強さを目の当たりにした。ここには世界中から人やお金が集まっているのである。また、QBS に交換留学で来ていた中国の学生たちに今度は中国で会い、その人たちに街を案内してもらうなどとても良くしていただいた。久しぶりの再会はとてもうれしかった。上海では、QBS の OB の方々ともお会いし、グローバルに活躍されている方々のお話を聞くことができた。いろいろな方との出会いが多くの刺激を与えてくれた。そして、何より先生方や一緒に ICABE に参加した 4 期 5 期の仲間たちと密な交流ができたことが、私にとってかけがえのない思い出である。内容盛りだくさんで多くのことを学ぶことができた ICABE、今回の経験を今後に生かしていきたい。また、こういった交流プログラムを作り、運営してきてくださった先生方、先輩方、ご協力いただいた関係者の方々に心から感謝している。

以上

ICABE 南京に参加しての感想

氏名 花田真(5期生)

異国を訪れる時、いつもワクワクした気持ちに心躍らせる自分がいる。様々な人に出会い、異文化に触れ、自分自身を振り返り、多くのことが吸収できるからである。その中でも、今回の ICABE 南京大学訪問は、私にとって生涯記憶に残るものとなったことは言うまでもない。生れてはじめての中国訪問、また出張でも旅行でもない南京大学との交流という、今まで経験したことのない異国訪問の機会だったからである。

毎日のように飛び込んでくる中国の経済発展の状況は、百聞は一見にしかず、今回の訪問で心に深く焼き付けることが出来た。上海空港に降り立った時に感じたなんとなくよどんだ空気、上海から南京への移動時の交通渋滞、上海周辺のかすんだ景色、南京中心街の発展と下町とのギャップ、南京市街を散策した際に感じた喉の痛み、大都会の上海、リニアモーターカーで体感した時速 431km、全てが新鮮で、中国経済発展の両側面を目の当たりにすることができた。

ドイツ系企業の Phoenix 社(南京)訪問、南京大学における特別講義受講及びプレゼンテーション&ディスカッションという、ICABE プログラムでしか経験できないであろう醍醐味も思う存分味わうことができた。

ドイツ系企業の Phoenix 社(南京)訪問では、日系企業の中国進出における技術移転の在り方について考えさせられた。Phoenix 社ドイツ本社は、技術移転と経営の現地化を積極的に進め、Phoenix 社(南京)はドイツ本国の技術移転による品質確保と、ドイツ本国から設定される売上目標達成に必要なマネジメントを徹底した現地化により実現していた。

南京大学との交流プログラムでは、まず南京大学ビジネススクールの規模とマネジメント力に圧倒された。高層ビルの校舎には、最新鋭の設備が整い、宿泊施設も完備されていた。プレゼンテーション&ディスカッションでは、同じテーマを中国の学生と日本の学生がお互いの視点でまとめ発表することから、ディスカッションを通じ考え方の共通点や相違点、あるいはお互いの関心ある事項が明確となり、非常に有意義なものであった。コミュニケーションの重要性を再認識することができた。

ICABE を通じた人との出会いや交流も素晴らしいものであった。趙院長をはじめとする南京大学関係者の熱烈的な歓迎、2007 年度後期に九州大学で一緒に学んだ交換留学生との嬉しい再会、講義以外で接する機会の少ない先生方との楽しいひと時、そして何より、今回 ICABE に参加し苦楽を共にした仲間と過ごしたかけがえのない時間は、何より大切な財産となるであろう。

最後に、このような貴重な経験となる機会を与えていただいた関係各位に、あらためて心から感謝を申し上げたい。

以上

ICABE 南京に参加しての感想

氏名 松本 幸博(5期生)

半年後にオリンピック開催を控え、急成長を続ける中国。今回の ICABE に応募した理由は、近年急速に経済成長を遂げている中国を自分の目で見て、肌で感じてみたいと思ったからである。しかし実際に ICABE を通して学んだことは、当初自分が予想していた以上に大変有意義なものとなった。

ICABE 初日、上海国際空港に到着した私たちを待っていたのは、空港から市内へ向かう高速道路での大渋滞であった。事前に留学生から渋滞のことは聞いていたが、遙か彼方まで続く車の列を実際に見ると、やはり驚きである。バスの中からは、次から次へと建設中の高層ビル・高層マンションが視界に飛び込んできて、中国の猛烈な勢いを感じさせられるものであった。

今回の ICABE の中で、特に印象深かったのは、二日目の南京大学の学生とのテーマ・ディスカッションである。2つの異なったテーマ についてそれぞれ事前に研究を行い、グループに分かれて発表するものであったが、そこでは中国の学生による考え方、新たな視点に触れる良い機会となった。彼らも私たち同様、仕事をしながらビジネススクールに通う学生であるが、ディスカッションを通じて、彼らのみなざる自信、貪欲な姿勢、表現力の豊かさを感じることができた。また、自分自身については、意見を英語で伝えることの難しさ、自分の語学力のなさについて痛感し、今後の学習へのやる気を改めて奮い立たせる良い機会となった。

ICABE のもうひとつの魅力、それは参加メンバーとのコミュニケーションではないだろうか。日ごろ講義でしか会うことのない教授や学生と濃厚な時間を共に過ごすことができるからである。航空券の手配からホテルの予約、スケジュールまで、当たり前であるが、ほとんどが学生による手作りであり、だからこそ連帯感も強いものとなった。ディスカッションの事前準備では、出発の数週間前からグループのメンバーとそれぞれの仕事が終わった後に集まってプレゼンの準備を行い、ICABE 初日の夜(テーマディスカッション前夜)にも歓迎会の後、メンバーの部屋で夜中の2時頃まで発表の準備をしたことは今となっては楽しい思い出である。

今回の ICABE では、多くの方々の協力のお陰で貴重な体験をさせていただいた。改めて感謝を申し上げたい。また、この ICABE での経験を今後の自分の糧として更なる成長を遂げたいと考えている。

以上